

・雨でも休まず、260回、261回・

「小原本陣の森・若柳嵐山の森」

- ・定例活動 : 5月 3日 (第一日曜日): 小原本陣の森・団地化を目指す、弁当持参  
\*ベテラン向き、担い手育成、技術向上、参加費400円、
- ・定例活動 : 5月17日 (第三日曜日): 若柳嵐山の森・里山交流、多様な森林活動  
\*一般むき、参加費400円、主食・自分の食器、飲料水。
- .....
- \*注意事項1 : 初参加者は、9時15分までに JR 相模湖駅前集合、ベテランは各自森へ  
・服装 : 汚れても良い服装、着替え・夏は黒色を避ける長袖、滑らない足元  
・持参 : 成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水
- \*注意事項2 : 危険管理・救急体制 : 森林ボランティア保険他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

・地域との交流・

毎月・定例活動日の参加者は大体、80~100名になる。全員が横浜や東京からの参加者で地元からの参加者はない。不思議に思う、無味乾燥の都会生活から逃れられる森林活動の、そこが森林ボランティアたる所以かも知れない。

活動の開始3年程は、「都会から来る胡散臭い輩(うさんくさいやから)こんなきつい仕事は何で面白いものか」という目で見られた。森林活動が「楽しい、面白い、癒しになる」などという事を森林地帯の人々にはどうにも説明しようがない。12年前は、森林ボランティアは殆ど無く、当初3年程は、いろんな形で妨害を受けた。行政は、「危ないから止める」と言った。隔世の感だ。

胡散臭くない森林活動を続けるためには、地域から受け入れられる活動でなければならない。地域に受け入れられるために、目指した活動は、「無理せず、急がず、休まず、楽しく、ポチポチと」であり、「継続は力・雨でも休まず・」であった。また、地域のお祭りや行事に参加し、地域に溶け込んで行くことを心掛けた。12年経過した今、いささか面映ゆい事だが当会は、地域財産とおだてられ、小原宿活性化推進会議の六つのプロジェクトの中で、三つのプロジェクトの核となっている。そのプロジェクトの一つ、「小原本陣の森(これまで、この名称は無かった)孫山景観コース開削班」のチームリーダーを引き受けている。

前期、小原集落入口から「小原本陣尾根」取り付けの「天明の嗣」まで当会は、約300mの登山道を完成させた。今期は、孫山先まで約1000m整備に取り組む。このコースは数百年後も残っているだろう。当会は、地域歴史も作っているのだろう。

## 若柳嵐山の森・定例活動（5月19日/第三日曜日）

報告：伊藤 小夜子

暑からず、寒からず、ふんわり心暖くなる快晴、陽気に思わず笑みがこぼれる。そんな日、森の花壇では、珍しい形と色のチューリップの乱舞がお出迎え。この日も爽やかな人たちが初参加。地面に足を踏ん張っている立ち姿。頼もしげな若者たちを加えて51名の参加。

・高校生たちの“望星の森”では、これまで準備を重ねてきて、いよいよ今日は植樹の日。アラカシ、シラカシ、ヤマモミジ、クヌギ、ネズミモチ、ヒメユズリハの6種・60本。これらの苗が置かれた森の中のテーブルは、2008年度の卒業生が作った素晴らしいテーブル。巣立つ人、新入の人、そして彼らは森をこうして引き継いでいく。生き生きと植樹に取り組む生徒と指導の声も高らかな宮村先生。参加の生徒も「疲れたけれど、「来て良かった！、楽しかった！」。

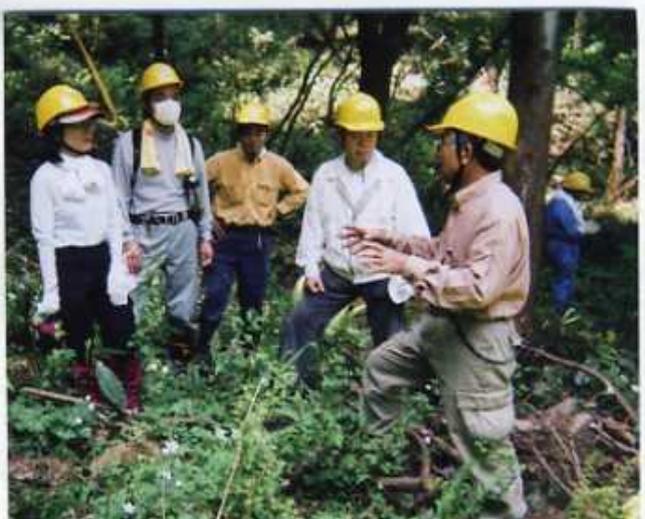


・大学連合 ForestNova は、一段と成長した新リーダーたちを先頭に“協力協約・整備森林 B 地区・ヒノキ林”経路づくりに取り組む。厳しくも細やかな指示を出す佐々木ファール指導員の助言を真剣に聞きながら、倒木を横にして土留めをつくる。見ていて力強い。



・森林整備班は、森をグルリと回って倒木整理や崩壊地の土留めなど。

・斎藤校長率いる初参加者による“緑のダム体験学校”の午前、森を周りながらの基礎知識講座。午後は巨木の森見学と間伐体験・皮剥ぎ。親子参加の小倉お母さんと息子の翔君の逞しさ。



・お花畑班はチップを撒き、スッキリと色和気の畑も美しく。

・帰路、駅前カドヤでの生ジョッキ、喉ごしも爽快、森作業の後の醍醐味は“コレダ！”自然の中で身体を動かす喜び。植物や動物に触れあいながら。

## ・相模原市：第3回・桂川・相模川の流域の森を守ろう：森林広報活動。

「木を使うことは（経済性創出）森を守ること（環境性保全）」

60万人の人出のある「第36回・相模原さくら祭」に協賛して参加した。一昨年、旧津久井四町を合併して、来年22年度には政令指定都市になる相模原市は、森林地域が市域の58%にもなる。70万人大都市で2万haもの森林地域（木材生産地）を抱える大都市は、相模原市しかない。しかも、その前面には、横浜・川崎・東京と約2000万人のメガ都市（消費地）が広がっている。

当会の活動目的は、「環境と経済がバランス良く成り立つ持続的社會づくり」である。これを具現化するために、“木を使うことは、森を守ること”を訴え続けている。当会は毎年、相模原市（4月開催・入場者6000人）と川崎市（9月開催・入場者7000人）で森林広報イベントを開催している。一昨年・昨年と実績を付けた事で相模原市は、相模原さくら祭会場に特別コーナーを準備してくれた。以下、森林広報の状況を報告する。

.....

### \* 報告1：学生連合 Forest Nova

Forest Nova 麻布大学2年 神宮理沙

いつもお世話になっております。Forest Novaの新代表になりました神宮です。今年度は現時点で他大学の一年生が3人入り、インカレらしくなってきました。至らない部分も多々あると思いますが、今年度も積極的に活動していきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

### 桜まつり ～木の時計・ノコ引き・パネル展示～

Forest Nova 麻布大学3年 嶋本祐子

4月4日、5日に相模原市で行われた桜まつりではForest Novaも出店のスペースを頂き、木の時計やノコ引き、パネル展示を行いました。

木の時計は木の温もりや香りを感じてもらうこと、また間伐材の価値を知ってもらうことを目指し、今回もお客さんに作ってもらう形で販売しました。「去年買いました!」という声には、自然と笑顔が溢れてしまいます。子供達だけでなく、大人の方も時計作りに夢中になってくれました。自分の好きな板や木の実を選ぶ事で、思い出としても大切にもらえると思います。



ノコ引きは自分達が嵐山で伐ったヒノキを使用し、木を切ることの難しさを体験してもらいました。時間がかかっても諦めることはなく、一生懸命取り組んでくれました。パネル展示は“活動や森について発信できなかった”という昨年の反省を活かし、担当者をつけて団体の説明や森のクイズを行いました。

木の時計は 42 個を完売、ノコ引きは 2 日間で参加者 170 人以上。また今回は Forest Nova のお手伝いとして他大学から 9 名の学生の参加があり、このような繋がりを後に続けていけるようにしたいと感じます。反省点は次回のイベントに活かしていきたいと思います。

たくさんの方にご協力頂き、本当にありがとうございました。

\* 学生連合 Forest Nova



「損保ジャパン」が立ち上げた学生による環境運動が、当会の森林保全に繋がったものである。2007年に学生連合の構想を持ち込んだのは、東京薬科大・前川院生であった。

前川院生の呼びかけに逸早く、相模原市の麻布大生が反応して今は、関東学院大・東京都市大・帝京科学大・慶応大・早大・青山学院大・創価大・法政大・山梨学院大等が参加している。東海大付属・望星高校・望星の森の指導者・宮村教諭も損保ジャパンの環境運動出身者である。

\* 報告 2：緑のダム北相模

報告：石村 黄仁

相模川上流・山梨県から 5 団体、中流・相模原市から 8 団体、下流・都市部から 4 団体が参加した。森林広報の目玉は、FSC（森林管理協議会）広報と FSC 認証材で作った“緑のダム FSC 材積木”。これに「さがみ湖・鉄道愛好会」が協力参加してミニ S L を運行してくれた。

入場者数 6000 人というのは、ミニ S L に乗車してくれた人数（2145 人）から割り出したものだ。ここで「環境と経済が併存できる証」として、ミニ S L 乗車の来場者に森林保全支援をお願いしたのだが、214,500 0 シエン・円（支援金）のご寄付を頂いた。シエンと言う単位は、“森林・支援 = シエン”と言う事だ。この会場では、ミニ S L の他、森の時計・森の茶席ムササビ庵・工作教室などで合計 298,000 シエン（円）の森林支援があった。



その他、森づくりモノづくりコンテストの作品展示をしたのだが、これに 30 万シエン（円）の協賛金の申し出があった。

環境運動は、お金（経済活動）にならないと言うが、そうではないと言う事を証明したと言うことだろう。国産材が売れないので林業が成り立たなくなっている。当会は、国産材を売れる仕組みを創出して林業再興を視野に入れて活動している。素人がと言う勿れ。当会はプロでも至難と言われる国際 FSC 認証林（若柳嵐山の森）を登録している。難しい話は抜きにして快晴の花吹雪の下、森林広報活動は楽しかった。

その他、森つくりモノつくりコンテストの作品展示をしたのだが、これに30万シエン(円)の協賛金の申し出もあった。

### \* 報告3：森つくりモノつくりコンテスト

#### ・ 優秀作品デザイン展示 ・

一昨年、相模湖町商工会と組んで「森林再生事業促進実行委員会」を立ち上げ、全国からアイデアを募集し、多彩に314点が集まった。

募集は、間伐材活用部門では、千葉市の馬場亮平さんの「草花の集合住宅」 ランドスケープ部門では、北九州市の岡本達也さんの「WOODAM」が最優秀賞に選ばれた。全作品の中から30点を選び、この広報イベントで展示した。



展示会場には、加山市長を始め相模原市の幹部の皆さんが来られ、これらの作品を熱心に見ておられた。2万 haの森林に隣接する70万人大都市・相模原市の林業行政に当会が貢献できるなら、森林NPO 冥利に尽きる。

今回2回目の全国募集で内容レベルの高さから、10年も続ければ、この関係ではデ

ザイナーの登竜門に育っているだろう。楽しみな展開だ。

### ・ 森再生へ・・・、毎日新聞社(水と緑地球環境本部)との協働

森林の持続的保全・再生を進めるため、毎日新聞社と当会は、「つながる森プロジェクト」を組むことになった。

創刊135周年記念事業として毎日新聞社のMy Mai Treeキャンペーンは、荒廃の進む人工林の間伐に市民団体/森林NPOと組んで推進する。この取組は、相模原市に拠点を持つ当会・緑のダム北相模と静岡県掛川市の廃村集落跡地で間伐に取り組む「時ノ寿クラブ」の2団体を実施団体にして進める。

当会の経営理念は、「森林破壊と言う負の遺産を子孫に残してはならない」であり、これらを形にする経営戦略として「森林環境と経済がバランスの取れている地域社会システムづくり」を標榜している。更に、分かり易くするために「木を使うことは(経済性創出) 森を守ること(環境性保全)」として、“森林(生産地)と都市部(消費地)をつなぐ”活動を展開している。

・ 5月20日：毎日新聞社(水と緑地球環境本部)と以下を話し合った：

参加：当会から、丸茂・川田・斎藤・石村。

\* 目的

森林NPOの“自立できるシステム”を探る(国民運動的な展開は出来ないか)。

将来への布石：若年の林業の担い手を育てる。

地域の伝統を重視し、森林環境と地域経済が矛盾なく両立する社会システムの構築

\* 内容

緑のダムは、NPOの特徴である“自由で柔軟な発想と行動”を最大限にいかす。

1%の専門家より99%の普通の人々との協働を目指す。

特に、望星高校生や学生連合 Forest Novaのような若者の育成を重視する。

善意・奉仕・無償、の非営利活動が、金権欲望の抑制力になるシステムを創出する。

この活動を毎日新聞社は支援し、新聞紙上で報告する。

12年間、雨でも休まずと続けてきたことを、毎日新聞社は評価してくれたのだろう。四大紙の一つである毎日新聞社から、こんな大きな課題を与えられた事は、いささか重荷だがNPO冥利に尽きると言うものだろう。取り組んで見る。

毎日新聞の記事について

著作権の観点から

ホームページ上での引用を  
差し控えました。

記事をご覧になりたい方は

2009年4月2日の毎日新聞をご覧ください。

## 緑のダム FSC 材積木：棧積み・林内・自然乾燥

“緑のダム体験学校”では、午前中は森林の仕組み講義、午後は、間伐体験・丸太伐り・皮剥き実習を実施している。

実習材の有効活用として「緑のダム FSC 材・積木」の試作第 2 弾に取り組んでいる。

この 1 年の実習で間伐材伐り出しが凡そ、4 立米程になったので小田原の大山製材所に持ち込んだ。持ち込んだその日、大山製材所の敷地は山



積みの木材で溢れんばかりで、当会の搬入材丸太の置き場を何処にするかと言う程の状況であった。(どうしてこんな事になったかと言えば、神奈川県の水源地環境税の関係で材が続々、森林から出てくるが、出口：販売先がないため、“糞ずまり”を起こしていると言う事である)

丸太を搬入して 1 カ月後の 4 月 1 日、大山製材所から製材が済んで、“林内・棧積・自然乾燥”を掛けているとの連絡が入った。林内・棧積・自然乾燥とは、聞いたことがあるが実物を見た事がないので早速、見に行った。製材済みの材は、製材工場から、10 分足らずの杉林の風通しの良い美林の入口にあった。

大山さんによると「使命感を持って、森林 NPO が育てた FSC 認証材だから自分も殊更、意識して緑のダムの事業に協力したいと思っています。いろんな乾燥方法がありますが、やはり自然のままが一番だと思います。自然の雨に打たせて風通しの良い林内で乾燥させれば、木の艶としまりが、丸っきり違います。良い製品を是非、作って下さい」と言う事である。溢れんばかりの在庫を持つ製材所が、製材を良く引き受けてくれたものだと思っていたのだが、ここにも熱い支援者がいた。

### 価値基準：“シエン（支援）”という考え方に付いて。

5 年前、「緑のダム北鎌倉」の代表の兼松まゆみさんが、間伐材・枝を使って“兼松人形”を作った。丁度、東京都庁で「甲州街道 150 周年イベント」があつて、これを出品した。

間伐枝を活用して遊び心で作った“兼松人形”で言わば原価がないものだから、価格を“円”と言わず「シエン・(森林支援)」・・・、“兼松人形、一個 1000 シエン”と表示した。20 個がたちまち売れて、後日の別のイベントでも、売れに売れた。

昨年の川崎の県の森林広報イベントでは「何で“支援”ですか？」の質問があつて、「森林

の保全・再生にご支援くださいと言う意味です」と言ったところが、「それでは、3,000 シエン寄付します」と言う人がいた。それも一人だけではなかった。

過日の相模原市での森林広報では、SL 乗車賃他に“シエン”を持ち込んだら、298,000 シエンものご寄付があった。活動が信頼性・共感に裏付けられれば、人々は積極的に寄付をしてくれるだろうか。医療看護に一生を捧げていた、マリーテレサさんの行く先々、寄付が集まっていたそうである。

人間社会は、経済活動が基本で、お金なしには生きて行けない仕組みになっている。お金は、全ての欲望を満たすことができるから、お金のために人殺しや、引いては戦争の原因にもなっている。



リーマンブラザーズ破滅の原因も、行き過ぎた欲望・金儲けシステムであった。リーマンの経営者もトレーダーも欲望に目が眩み、世界を混乱に巻き込んだ。こう言う欲望の渦中で、善意・無償を前提とする非営利活動での“シエン”という寄付行為は、新しい価値観の創出にならないものだろうか。

価値を決める貨幣単位の取り決めは、国家の専権事項であるが、NPO が“シエン”なる価値単位・思想の拡大を、国の専権事項に抵触させず広げる事が可能だろうか。法律家や経済理論の専門家の知恵も借りたいと思う。正当な価値基準として認知されれば、普及に取り組んでみたい課題だ。

活動のモットー : 急がず、楽しく、無理せず、休まず、ボチボチと・・・  
そして、沢山の参加で森は良くなる。

名 称 : NPO 法人緑のダム北相模

事務局 : 154 - 0023 東京都世田谷区若林 3 - 35 - 9

発行人 : NPO 緑のダム北相模・運営委員会 : 03 - 3411 - 1636

H P : <http://midorinodam.jp>

E-mail : [info@midorinodam.jp](mailto:info@midorinodam.jp)

協働団体 : 神奈川県 (政策部土地水資源対策課、環境農政部森林課、県央地域県政総合センター) セブンイレブンみどりの基金、相模原市 (市民協働推進課) 毎日新聞社 (水と緑地球環境本部)

ご支援の団体 : WWF・japan, イオン財団、市民社会チャレンジ基金、神奈川県建具協同組合、生命の森宣言・東京